

われらつねに知る  
そが水の面は静けく  
遠き灰色の空を映し  
眠れる石河床を流轉るゝを

われらつねに知る  
河岸にありて

七彩の光——響くものをきかず

たゞ冷氣を感じるのみ

われらつねに知れるや  
空と水との間に在りて  
われらが生 閃光する  
魚鱗にも等しきを。

そも何處へ行つたのであらう

眩しい電燈の光を避けて  
私は後庭に降り立つた、

薄墨で描いた樹影は

濕地の上にひそみ

素絹の傘の内に

月は脂粉の面を微かに染めてゐる

あゝ かゝる夜を

かゝる夜の美はしき妖魔に

誘はるゝまゝに身も心も

委ね明かした過ぎし時よ

戀人よりも愛しいその姿よ

それは恰かも今宵、朧夜に

梢から土塀の上へと彷徨ひわたつて行く

黒猫の影の如く

音もなく、時もなく

すらすらと消え去つてしまつた

.....

そもかの姿は何處へ行つたのであらう。

淋しすぎる春

春だといふのに

うす暗い部屋に坐つてゐるのはいゝことだらうか

何處へ出かけても、何處を歩いても、そこらぢゆうに

のんべんと春が蔓延してゐるといふことはこの世の幸  
ひであらうか、

書物を持つて片手にステッキをついて  
春を尋ね給へといふばかりがある

狂氣ざくらよ 咲いたからには  
その舞の手を振つて見せてくれ

そしたら其時こそおれは  
重たい書物を藪の中へ投げこんで  
ばか者のステッキをもぎ取つて  
晴ばれと散歩しやうよ。

## 坂道を行く

かうして坂道を歩いてゐることが  
私に何のかゝはりがあるのか。

私の虚ろな心に泌み入るものは

見渡す限りさむざむとかゞやく  
この境界の新緑のかけばかりだ  
咲いたものは既に散り果てゝ  
雨ばれの土は重たく沈み切つてゐる  
空にはすゞろかな風が渡つてゆくのに  
疲<sup>つ</sup>勞<sup>か</sup>れた肢はこの初夏の景物を拒絶するやうな憂鬱を  
運んでゐる。

どうしてあんな遠い遠い旅を思ひたつたのだらう――  
今しがた別れて来た人の顔が胸に詰<sup>つか</sup>へてゐるのだ  
何處まで行つても、何處に居ても、  
あゝ私達人間の姿は、二本の肢でわづかに立つてゐる  
不安の影だ  
この坂道の両側には  
どれだけ行つてもさむい緑陰ばかり。

彼はあれつきり此方を向かないかも知れない——  
否、存外またこの縁を晴れやかに眺める時があるかも知れない——

それが私に何のかゝはりがあるぞ！

私の虚ろな心に泌み入るものは  
見渡す限りさむざむとかどやく  
この界限の新緑のかげばかりだ。

### 書簡箋

一人の男が廊下に腰かけてゐる  
半ば開いたガラス戸の間から  
五月の濕つた風が流れ入る



男は手に銀飾りのあるパイプを持つてゐる  
多分、詰つたのだらう  
たんねんに紙捻を拵へては通してゐる

薄い上等の日本紙で出来た書簡箋だ  
彼が七年も以前に少女から貰つたものだ  
少女が嫁いで行くときの一切の道具と  
一緒に揃えたものゝ中から………

男は模様入りの書簡箋を大切に持つてゐた  
それを如何に遣つていゝか解らなかつたので………

いま男は、それを紙捻に拵えて  
パイプを掃除してゐるのだ  
彼のパイプのよく詰ることよ………

細心に通しながら男は思つてゐるだらう

——これがきれいになつたら新しく買つて来たあの細  
巻を一本喫むでやらう、と。

## 存 在

たつた一つの藻草が  
たいへん綺麗に見えたのです  
古いお濠の濁つた水の上に

雨ばれの午後のこととて  
高雅な瓶の模様に見るやうな  
捨てがたい趣きを有つて居ました  
のんびりとした散歩の足を止めて  
暫くは見とれてゐたものゝ  
在るものは在るがまゝに——  
といふほどの心もちもなく  
其處を過ぎてきました

藻草——それ自身は識らぬこと、  
しかし私は 冬になつても  
あの鮮やかな色彩を  
想出すことができるでせうか。

音信

白々と目醒めの朝に陽は寂しい  
かくまでに明るくさし入る故に  
何も彼も忘れて  
昨夜は眠入つたものを

まづ揺り醒まされる一片の音信  
この陽の下に拾ふ文字は……………  
そも何がよろこばしく  
何を悲しと感ずるか

あゝ絶えざる音信  
遂には目醒の朝の紙面に  
白々と消えゆく

束の間の音信  
それは扉を叩く音か  
過ぎゆく鈴の響か  
さて吾はこの紙面に  
何を記して托すべきか。

一輪挿

咲いたつきりで  
ものひとつ言はふともしない  
香りもなく たゞ  
揺れて見せるばかり

何といふ味氣ない生涯だらう

さらさらと

白い頁を繰返すひまを

微かに揺れるものよ

何といふ味氣ない生涯だらう

咲いたつきりで

香りもなく たゞ……。

## 烈風の日

部屋の内側で、騒ぐ音を聴いてゐるのは

なんと擾亂されがちなことであらう――

しつかりと着衣を縛りつけて一歩

踏み出して見ると  
思つてゐた通り——思つてゐたよりも  
烈しい力で歩かなければならなかつた  
私は野原へ出た  
空は蒼く 白い一筋の路の上に  
何處までも穩かに擴がつて見られた  
がその下に若々と育つてゐる  
草や野菜の類は

困憊した葉裏を白々と低頭れ  
見渡す一面の原は  
嘲笑の前に伏す羞恥を露はしてゐた  
度々起る突風の中に  
ともすれば私自身の「存在」をすら  
忘れがちに 慌てゝ攪みながら  
かゝる間に飛んでもない



一つの野心を起して見たのである

私は畑中に降りて

一枚の葉をしつかりと仰向けて見た

何の目的があつて？

何の興味があつて？

今、静かな私の部屋の中に

新しく増えたものは 一枚の草の葉

嬌やかな頸は掻き切られて――

私はやがて萎えゆく一葉の面を  
凝視するばかりである。

記  
憶  
？

——不意に昏倒しさうになつたのでおれは慌てゝその  
店を出た

白日が眼瞼の上になやましく射してゐる

こんな街路が何處まで續いてゐるのだらう  
疲勞れた眼をなほも左右に配つてゆく  
これでもおれは一軒の家を探さうとしてゐるのだ  
おれの案内者は慥かな見當をつけてゐるらしいが  
おれにはその地圖をはつきり見ることが出来ない  
それは夢の中の記憶のやうでもあり  
煙の間にかいま見た映像のやうでもある

(どうしておれはこんな残酷な案内者を頼まなければ  
ならなかつたらう?)  
希くばひよつくりと此奴をすつぽかしてやつて 横町  
の涼しい喫茶店の椅子で  
暫時でも無心になつて息づきたいものだ  
先刻だつてさうだ おれはあんな書籍店などへ飛込ん  
で大慌てに並んでゐる背文字ばかり拾つたのでほんた  
うにすんでの所だつた

(まあずんずん先へかまはず行く此奴の背の憎々しげなことは！)

が待てよあの中でどの書籍がいちばんおれの氣に入りさうだつたかな？

——それらはみんな砂濱の足跡のやうに

靡氣でおれには虚だ

或は！今おれが探さうとしてゐる家に存外ちやんと納

まつてゐるのかも知れないぞ

幾年も幾年も以前から——

おゝさうだ

さうして そいつに出會したが最後おれはそのまま物

が言へなくなつてしまふのかも知れない

大いなる觀喜に襲はれて！

## 花辨が食べたい

これは病的と名づけられるものでせうか、  
私は今晚 鹽辛い肴で酒を飲むのです  
だから——といつても、それは余りにヘンなのです  
鹽辛い肴は焼杭で 飲む酒が泥水のやうな氣がして

ならないのです

のどの渇くのは無論ですが

いくら茶や水をがぶがぶやつても

倒底癒りさうにもないので

私はふと　この春上野の山を歩いた日のことを思出し  
ました

晩春に近くほんのりと汗ばむ少しちりちりする午後の  
陽さがり

都の雑踏の中で私は幸福でした

實には、はらはらとさくらが散つてゐました

あつ　それですそれです

私は今その花辨が食べたくなつたのです

どれだけ水を飲むでもこの渇きは止みさうにもない

あゝ私はあの花辨が食べたい

が　今どき何處にそんなものがあるだらう

ましていまとなつてはさらに………  
私のはげしい渴きは止みさうにもない。

——一九二三、九、一三——

詩集 壁 完

余 言

時々の詩作の中から最近二ケ年間の所産を集めたものである。  
排列の順は年代よりもスタイルの類別により多くよつた、但し一  
二の例外はある。作品を繰返し讀むことは作者にとつて余りいゝ氣  
持がしないと同じく、私は私の過去を永久に壊れた別荘の中へ閉ぢ  
込むでしまひたい。  
この集を出すことによつて多少とも私自身少しでも軽い氣持ちに  
なれ、ば満足なのである。

一九二四、六

著 者

詩集『壁』

定價壹圓參拾錢

大正十三年十一月卅日印刷  
大正十四年二月廿日發行

著者 今井俊三

發行者 前田隆一  
東京市日本橋區元大工町一番地

東京市神田區豐島町四番地  
豐盛堂・東京印刷合名社

印刷者 龜田督

發行所

東京市日本橋區元大工町一番地  
振替口座東京三三一六番

紅玉堂書店



538  
72

終